

'91全日本ラリー選手権第3戦
'91ACK SPRING RALLY

■ 4月20～21日/大分・熊本300km

撮影●坂本眞志/報告●村井 晋

3年目に「ザマアみろ！」
山口修がCクラス初優勝
バルサーが真価を発揮し
1-2-1-3独占!!



【ザマアみろり】「次は買えてみよろ」と表彰式でやり合う山口と榎井。



山口隆/松尾博成が7年連続2位の悔しさを一気に晴らした。勝てそうで勝てなかったこのラリーを、勝利が安定した強みもあって初制覇。

「ドライバーズ」の補給（ACRスプリングラリー）は、バルサーGT-Tourの本来の実力を測る意味で、これまでに以上に注目されたイベントだった。結果から先に報告しよう。バルサーはとてつもなく速い!!

バルサーにとっては不利と思われた補給路のラリーで、ライバルマシンをことごとく蹴散らして「イーニー」フィニッシュを決めてしまった。そして、その頂点に立ったのが山口隆だ。

【ザマアみろり!!】

プリアストンの奇襲であり、山口にとっては最大の目標である榎井幸彦に表彰式で放った言葉に、山口の喜びの大きさが感じ取れた。ここ2年間のACRで、山口は完全に抑えられていた。2年前には榎井、山内伸徳とトップ争いを演じて散れど、昨年、ついに連勝で榎井を上まわった。しかし、結果は2位にこどもった。山口には「榎井さんに勝つこと」しか願ひがなかった。

そして今回、連勝ではわずかに及ばなかったが、勝利を得た。昨年の逆パターン。5年に経て「FA」で初めて全日本戦にチャレンジャーとして以来、7年目にして初めてつかんだ総合優勝だ。それ以上に山口の興奮には、榎井さんに勝てた、という思いが強くよぎったはずだ。「ザマアみろり」は山口の嬉しいだけの喜びの表現だったのだろうか。

その榎井、地味ならず絶対的で開幕戦から3戦連続の5位トップ。ポイントでも早くも200点を稼いだ。が、榎井としては「もう2位はいらぬ」の勢持ちは強い。バルサーのボクシング、セマイングには十分な平心静気をつかんだ。因襲、広島の榎井にとっては正念場だろう。

さらに、3位の高橋正博、ベテランが完全復活だ。終盤のサスペンショントラブルがなければ山口をも抑えていた。バルサーの完全勝利で、これからのシリーズはより熱を帯びてきた。

【詳細と結果は「イーニエ」ページ】



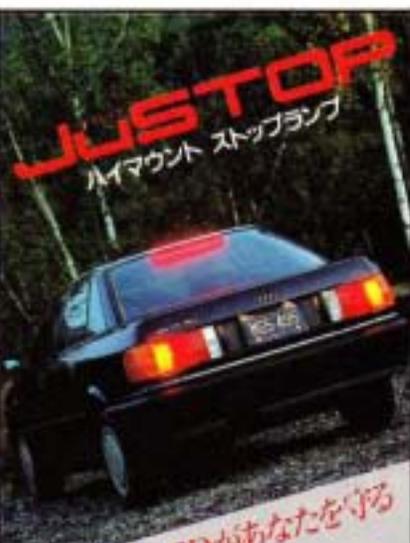
残り255mでのサスペンショントラブルがなければ、優勝カップも手にしていた高崎正博、それでも3位が



「セロイグ」と雪山をあ
まれば最高の最高の結果は

'91ACK SPRING RALLY





JUSTOP
ハイマウント ストップランプ

超高輝度LEDがあなたを守る
スタンレーの
ハイマウント ストップランプは
国産車純正装備率No.1です

車種別取り付けタイプ

LEDストップランプ JS3102
超高輝度LED採用ストップランプ



- 取付可能車種：セダン・ハッチバック・ワゴン・ミニバン
- 定 価：DC12V・5.8W
- 使 用 光 源：超高輝度LED30個
- 標準小売価格：12,000円

車種別取り付けタイプ

LEDストップランプ JS4102
超高輝度LED採用ストップランプ



- 本 体 色：白・黒
- 取付可能車種：セダン
- 定 価：DC12V・5.8W
- 使 用 光 源：超高輝度LED30個
- 標準小売価格：12,000円

大切な人のために選ぶべきパーツがあります。

ジャストストップは、ドライバーの意思を速く確実に後続車に伝え、安全で無駄のないスマートなカラーリングを約束します。どんな車種にも合うシンプルで美しいデザイン。価格もお求めやすく、取付けは簡単です。

STANLEY スタンレー電気株式会社
STANLEY ELECTRIC CO., LTD.

本社/〒153 東京都目黒区中目黒2-4-13 TEL.03(東京)3710-2322



昨年はまだダートだったオートポリスが完成し、フルコース2トライのSSが行われた。



オートポリスSSで2本ともベストは西尾雄次郎。ニコまではよかったのだが……4位。好調チームイスイズ勢だが、復活した大桃に届かなかった。最上位は小林康晃の2位。

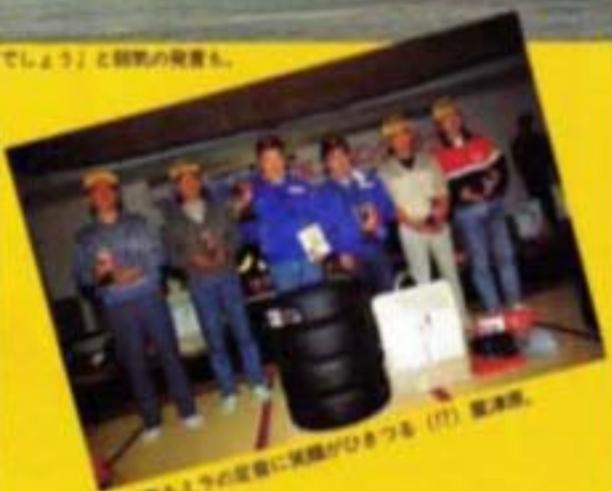




何もなかった車体重量だったが、この時の台風に厚みを感じ勝利。「次はダメでしょう」と開発の発言も。

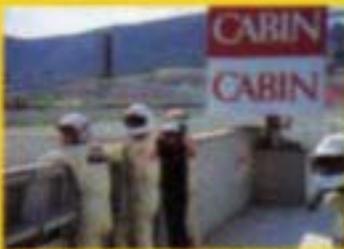


5.5L区間でベストをマーク。完全に車体重量を制御内に入れた超軽量車。

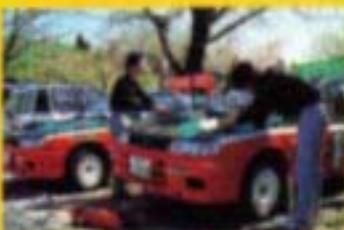


駆け回るクルマの足音に笑顔がひまづる (17) 車検前。

'91ACK SPRING RALLY



オートボリスらとほかのクラスの選手との走りも研究するCクラスの強豪たち。



ワークスマジックカに車正産生が帰ってきた。約1年間のプランクで愛護者時代



夜陰の下でのサービスもまた楽し。スパカじゃなくて各ビールなら買うことなし?

修山口を撃破した



「山に入る3ステが勝負!」と闘志をみなぎらせ
2年分の借りをまとめて返そうと山口は燃えた

超高速SSの オートボリス

全日本ラリー選手権シリーズ
第3戦「ACCスプリングラリー」は、スノーイェント3戦か
ら約2か月という長いインターバ
ルを隔けて、4月29・31日の両
日にかけて開催された。

ACCスプリングラリーは昨
年、まだ建設中だった丸瀬町の
サーキット、オートボリスのこ
いし用に整備されたオートを使
い、アスレージスデイド1000
km/ltサーキットのハイスピード
走車を行い話題を呼んだ。その
オートボリスが昨年暮れに完成
したため、今回はフルコースを
使ったサーキットランを主とし
て設定。つまりタイムトライ
アル””している。それも、

「当初、オートボリスの建設費
に特設会場を設けて、タイム
アルを走り行う予定でしたが、
建設費が現在工事中でコース
を確保できませんでした。その
ため、1トライだけにすむつも
りだったオートボリスの走車を
3トライすることにしました」

3年目にして“天敵”

会心の
「桜井さん！
ザマァ見る！」

■ダートイベントに突入した全日本ラリー選手権で、いきなり速さを見せつけたのがバルサーGT-R勢だった。大詰めの第3ステージ、雌雄を決するべく、「山」へ向かった高崎正博、山口修、そして桜井幸彦。一進一退の攻防戦はラスト2SSとなったところで、大きなドラマが起こった。そして最後に笑ったのは――。(村井 豊)

(鹿児島県伊佐市)

というように、ベイトレインの出口からスタートし、ベイトレインの入り口付近でゴールという、インストレートの一部を除くアルユース、約4kmのサーキットが3区間設定された。ベストタイム(西尾雄次郎、ヤマトVエース)のアベレージが1分58秒/周という、異例のハイスピードSSとなった。ラリーは、20日の正午に西尾正博が最高速をマークして、翌日午前4時ごろにゴールする3ステージ制、最近の全日本としては、長時間のイベントといえるだろう。ゴール後の選手のコ멘トも、

「ラリーらしいラリーだったね。結構長く走らせてくれるラリーは好きなのはうだから、面白かったよ。」(加藤 健)

とおおむね好評だった。

各ステージの設定は、第1ステージが今回の目玉であるオートボクシングのためのステージ、城島高原をスタートして、阿蘇の名所やまなみハイウェイを風向き確認かけてオートボクスへ行く、そして駐車場を迂回したじゅんこーナナスと、オートボクスサーキット2SSをこなす、再び城島高原のサーピスに戻る設定だ。この区間に關しては、選手側からも

「何もオートボクスまで行くことはない。その道のりがムダ。オートボクス集合をスタートにして、第2ステージで城島高原に戻るルートにラリー区間、SSを設定することもできたのではないかと」

という不満が湧いた。そのあたりを主催者代表の徳尾健夫長に聞くと、

「確かにそういう考えもありませう。今後、オートボクスが継続的に使えるのであれば、単発は継続はありますがね」という答え。新たな展開に期待したいところだ。

話を戻そう。続く第4ステージは、SSが1区間あるものの、TCTPのサーキットエリア区間が削かれたナビゲーターメセナシ

「そして、最終第3ステージは、SSが7区間設定され、それを7CPのリライアビリティ区間でつなぐ、ドライバーズセクションとなっていた。」

「ドライバーの第1戦目となった今回のラリー、スタート直後の活劇は、何といってもバルサーGT1-Rのダートセクションの熟成度だ。ちなみに、Cクラス2位の内訳は、バルサーがトップシェアで13台、ポーターが11台、レガシィが4台、セリカが3台、ファミリアが後藤正和1台と、バルサーユーザが一段と増している。」

チーム神奈川日産が1—2

「そのなかでも、前年優勝の佐井幸彦、前年SSトップの山口博が最も注目される。ともに、第3戦からのインタバルの間に十分ダートペースを進めていた。彼らのほかにも、岐阜美津雄を筆頭に、チーム神奈川日産の高崎正博、島田親吉、前田TRCAで速いところを見せた原山陽彦、地元九州のベテラン中村芳徳ら、注目すべき選手は多い。高崎は、

「かなりバルサーは熟成されました。ウチではみなさんと違った方向でセクションを進めているようですが、第3戦には自信を持って挑めます。」

「かなりバルサーは熟成されました。ウチではみなさんと違った方向でセクションを進めているようですが、第3戦には自信を持って挑めます。」

「かなりバルサーは熟成されました。ウチではみなさんと違った方向でセクションを進めているようですが、第3戦には自信を持って挑めます。」

「かなりバルサーは熟成されました。ウチではみなさんと違った方向でセクションを進めているようですが、第3戦には自信を持って挑めます。」

「かなりバルサーは熟成されました。ウチではみなさんと違った方向でセクションを進めているようですが、第3戦には自信を持って挑めます。」



「チームがまきカーニエントリーということで、同じセクションにしても意味がないし、Bからスタートアップしたばかりだから、C車に慣れるため」とチームリーダーの高崎正博はいう。これがかえってサーキットランで勢を喪失したようで、島田も、

「LSDがない分、フロントが真直に入ってくれた。ただ、林道での立ち上がりでのトラクションなんかを考えると、LSDなしだとときついかもしれないね」と証言する。彼ら3クルーがトップを形成したものの、それほど差の出るコースではなかったため、10秒差のなかに10クルーがひしめいている。最終機嫌を崩して、いよいよ本格的にラリーの始まりだ。

「山に入ってからが勝負ですがかなり」と慎重なコメントながら、気分が悪いはずがない。西尾に続いたのは、ベテラン加勢裕二／北野元。そして島田親吉／高岡勇二がバルサー勢トップ、西尾に5秒差の3位につけた。実

「バルサーのターマックス性能の高さが、ベストタイムに結びついていた。」

「バルサーのターマックス性能の高さが、ベストタイムに結びついていた。」

「バルサーのターマックス性能の高さが、ベストタイムに結びついていた。」

「バルサーのターマックス性能の高さが、ベストタイムに結びついていた。」

プロサイクリングの総集編!! 遊タマラリー・グランド・スプリント 全3巻 絶賛発売中

好成績をし、鞍部もSSを前記のように5位タイで上がっている。これで鞍部は高崎と並んだ。さらに、本命山口も続いた。山口はSSでは3秒差の3位ながら、松尾ナビが5点で抑え、トップ島田に3秒差まで追い上げている。

「このラリーは絶対に取りたいラリー」といふ山口の気持が伝わってきそうな迫り上げた。もちろん、勝負は3ステアの林道SSです。よきよきは絶対負けません」と山口がいうように、3ステア勝負は、上位陣の合言葉だった。彼ら5クルーがトータルで550点台。続く60点台には、神岡(61点)、加勢(62点)、杉本、前嶋光男/岡本敏(63点)、そして板井/大藤敏夫は、ドライパー、ナビともまだエンジンがかかってきていないようので10位(64点)にとどまっている。以下、山内伸亮/遠藤彰(66点)、大庭

速さで負けても勝負に勝つ

3ステアが勝負」と各選手がサイプレスで手ぐすね引いた第3ステージは、ターマッタSS3区間、ダートSS4区間、合計20.24kmのSSが用意されている。

このステージがスタートしてすぐに、あろうことが島田がラ

談介/小田切 順之(67点)のアドバン・タス力勢という順で上位のオーダーが形成された。

順位	選手名	所属	タイム
1	島田 隆	高知	47.5
2	山口 隆	高知	47.5
3	松尾 ナビ	高知	47.5
4	高崎 隆	高知	47.5
5	大庭 隆	高知	47.5
6	神岡 隆	高知	47.5
7	加勢 隆	高知	47.5
8	杉本 隆	高知	47.5
9	前嶋光男/岡本敏	高知	47.5
10	板井/大藤敏夫	高知	47.5
11	山内伸亮/遠藤彰	高知	47.5
12	大庭 隆	高知	47.5
13	神岡 隆	高知	47.5
14	加勢 隆	高知	47.5
15	杉本 隆	高知	47.5
16	前嶋光男/岡本敏	高知	47.5
17	板井/大藤敏夫	高知	47.5
18	山内伸亮/遠藤彰	高知	47.5
19	大庭 隆	高知	47.5
20	神岡 隆	高知	47.5
21	加勢 隆	高知	47.5
22	杉本 隆	高知	47.5
23	前嶋光男/岡本敏	高知	47.5
24	板井/大藤敏夫	高知	47.5
25	山内伸亮/遠藤彰	高知	47.5
26	大庭 隆	高知	47.5
27	神岡 隆	高知	47.5
28	加勢 隆	高知	47.5
29	杉本 隆	高知	47.5
30	前嶋光男/岡本敏	高知	47.5
31	板井/大藤敏夫	高知	47.5
32	山内伸亮/遠藤彰	高知	47.5
33	大庭 隆	高知	47.5
34	神岡 隆	高知	47.5
35	加勢 隆	高知	47.5
36	杉本 隆	高知	47.5
37	前嶋光男/岡本敏	高知	47.5
38	板井/大藤敏夫	高知	47.5
39	山内伸亮/遠藤彰	高知	47.5
40	大庭 隆	高知	47.5
41	神岡 隆	高知	47.5
42	加勢 隆	高知	47.5
43	杉本 隆	高知	47.5
44	前嶋光男/岡本敏	高知	47.5
45	板井/大藤敏夫	高知	47.5
46	山内伸亮/遠藤彰	高知	47.5
47	大庭 隆	高知	47.5
48	神岡 隆	高知	47.5
49	加勢 隆	高知	47.5
50	杉本 隆	高知	47.5
51	前嶋光男/岡本敏	高知	47.5
52	板井/大藤敏夫	高知	47.5
53	山内伸亮/遠藤彰	高知	47.5
54	大庭 隆	高知	47.5
55	神岡 隆	高知	47.5
56	加勢 隆	高知	47.5
57	杉本 隆	高知	47.5
58	前嶋光男/岡本敏	高知	47.5
59	板井/大藤敏夫	高知	47.5
60	山内伸亮/遠藤彰	高知	47.5

「このラリーは絶対に取りたい」といふ山口の気持が伝わってきそうな迫り上げた。もちろん、勝負は3ステアの林道SSです。よきよきは絶対負けません」と山口がいうように、3ステア勝負は、上位陣の合言葉だった。彼ら5クルーがトータルで550点台。続く60点台には、神岡(61点)、加勢(62点)、杉本、前嶋光男/岡本敏(63点)、そして板井/大藤敏夫は、ドライパー、ナビともまだエンジンがかかってきていないようので10位(64点)にとどまっている。以下、山内伸亮/遠藤彰(66点)、大庭

「ここでも25点。さらに、「ミスコースの嵐だよ」と苦笑いをするが、16、24C Pで取り返しようがない20、101点の大量減点を受けてしまった。SSでは2区間ベストタイムをマークしたが、ミスコースの動揺からか、ほかのSSでは走りか乱れてトップとトリータルで25秒差。だが、今回の島田の健闘は、今シーズン占う意味で興味深いし、評価されているだろう。

鞍部はここでパースト。このSS以降もパーストに苦しんで、「最後のほうは右2輪が簡装用のセミレインジンドで、左2輪がダート用タイヤになってしまった。3ステアに入っていくなりだつたからね。ダートの実戦テストもできなかったよ。まあ次に期待してよ。」

と情しくも戦列を離れてしまった。彼らをシリ目に浮上してきたのが、山口と板井だ。SS5で高崎、中村らと同様のベストを度切りに、高崎を追い上げ始め

応援します!!
モータースポーツ。

(スタッフがあなたと一緒にステキなオリジナルを、お創りします。)



ステッカー

ITEMS

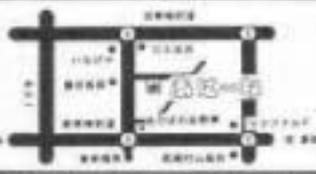
- ウインドブレーカー
- ジャンパー
- トレーナー
- Tシャツ
- ヨットパーカー
- ポロシャツ
- はっぴ
- エプロン
- ワッペン
- ししゅう
- キャップ etc.

〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
プレイタイム本社

商品全国配送OK!

電話orはがきでお気軽にご連絡下さい
くわしい資料をお送りします。

ORIGINAL-PRINT-WEAR
sportsfashion あに〜な



東京都武蔵村山市三ツ木1-204-47

0425-60-1229

チームのオリジナルブランド作りませんか?

勝っていた選手を見つけた。特にターマックスSSでは、4区間ともベストタイムで上がっている。その原動力となったのは、ベテランならではの「ヨミ、セツ、タイミングが当たったこと」も理由にあげられる。

「今回はサーヤットがあるってことと、調子が結構ありそうだという情報が入ったので、思いきってターマックスを練習用に振ってきんだ」

通常マシンのチューナーは、ダートでの路面干渉とトラクションの減少を考慮して、スプリングを硬く調整していない。だが、今回の大機は、スタビライザーを装着した。

「ダートでの路面干渉は、特に気にならなかったね」

これが見事に当たった。ターマックスだけでなく、ハイス

ピードコースのSSでも、ベストの小西選手に1秒落ち、別コースのSS9ではベストタイムをたたき出している。当然練習用にサスペンションを仕上げていけば、ダートでは動きが衝突になる。そのマシンをコントロールしたのだから、大機がいかに乗っていたか、よくわかるだろう。

大機の度合いでクワカカしていられたくなったチームイースト勢は、ユースが前記のようにリタイヤしたが、小西がダートのSSをベストで上がり2位、小枝選手が3位でフィニッシュしている。チームイースト以外、主役不足のBクラスにあって、ベテラン復活は、これからのシリーズを



オートポリス交差点を渡る栗津原と僕

白くしてくれるカンパル利になるだろう。

Aクラスは、ゴール後栗津原君の笑顔が引きつった。優勝したにもかかわらず、まるで敗者のような顔だ。

「サバイドすよ、西田(敬夫)」

さんがリタイヤしなかつたら、負けていたかもしれない。栗田(敬夫)さんとも8秒差でしょ(SSスタートは秒差)。ミラはもう少し直つてくるでしょうし、こっちはもう仕上がったクルマですから、やりようがない。こりゃサバイドすよ」というのだ。栗津原は、オートポリスSSでこそ、ニンリンが高回転駆動のアルトの特性を生かしてトップにたったのだが、2ステSS4で1秒、3ステSS5で3秒、ともにベストタイムの西田に食けている。その西田は、今回からタイヤサイズを12インチに下げて挑んでいる。

「12インチの没入がごまかしが利くんですよ。もちろん、絶対的なトラクションは12インチのほうが高いですよ。でも、ラリー1みたいな未知のコースを走る

場合には、ごまかしが利いたほうがタイムが出やすいでしょ」という理由なのだが、それが当たったようだ。しかし、栗津原との戦いで優位にたち、トップで迎えたラリー区間でペースト。続くSSのスタート時間間に合わず、結局、リタイヤとなってしまった。今回の結果から判断すると、アルトとミラの差は、なにに等しいといっていだろ。栗津原もそろそろマージンを残した走りでも優勝をさちることが難しくなってきた。

「やりようがないですからね。次までに、各部をリフレッシュして、キャッチ作り直すつもりですがどうでしょう」

これまでに、栗津原の独壇場だったAクラスも、シリーズが進むにつれ、接戦の面白い展開になりそうだ。



草加浩平の ナビ講座

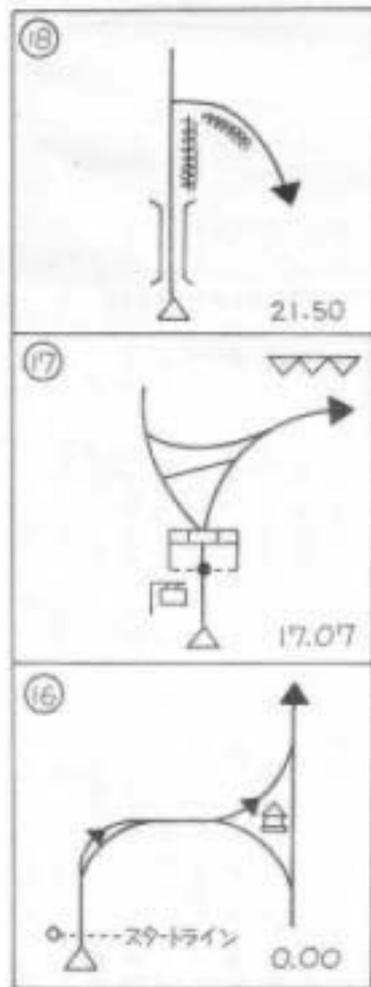
「ラリーを読め！」

指示書でわかるラリーの組み立て

第2戦の旭川のスノーイベントをイギリス出張で欠席したばかりとあって、2か月ぶりのラリーとなったA/C Kスプリングラリー。昨年、一昨年と2連勝したラリーであり、当然今回も優勝を意図して臨んだ。

昨年は工事中だったオートボリスがすでに完成し、今回はここでSSが行われることになっていた。このため用意したタイヤはサーキット用のダンロップ・フォーミュラRの185/60-14と、ダート用のダンロップ

第1ステージは予想どおりの幕開けとなった。オープンしたばかりのオートボリスはとても立派で、さすが最先端のサーキットと思わせるに十分なものであった。しかし、約3km地点から最終コーナーにかけての1kmで約50m上る部分では、パワリーの差が出てしまい、サーキット走行のSSでは1本当たり6〜8秒の差をつけられてしまった。



第1ステージを終わったところで成績を比較すると、Bのトップは加藤剛選手。われわれは15秒の差をつけられ、やっと1

第1ステージを終わったところで成績を比較すると、Bのトップは加藤剛選手。われわれは15秒の差をつけられ、やっと1

コマ図に記された距離で補正

まず最初のコマ地図(17図)で補正率を算出する。これに次のコマ地図地点(18図)までの区間距離を掛けて、18図地点を予測する。実際に18図地点に行

スタート前のコース図解析とデータを活用し ミスコースが続出したコマ図も難なくクリア

ったところ、予想したより区間距離で約10m少なめに出了。

そこで18区地点で計測するときは、ハンドルの切り始めの地点を考えられる範囲で少々奥に

データを信じミスコース回避

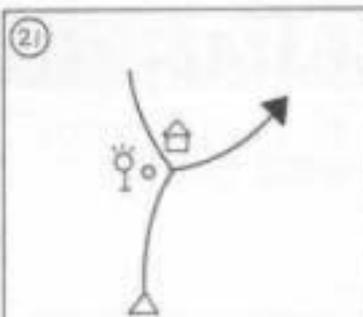
第2ステージ開始早々、アベ36km/hで走行中の21区で、ミスコースが続出した。路面が悪く、アベ36km/hでもかなり引っかく(われわれの場合2・5kmで約120m)ので、正確な距離をつかみにくかったことと、図に示すように実際のコース形状の印象(観角右)とコマ地図の形状が少々異なっているために起こったことだ。21区の220m先に最初のチェックポイントである5C/Pが出てきたために、ミスコースしたクルマは大量減点を

とって計画した。そのうえで、補正率としてはスタート(16区)から18区までの距離をベースに算出したものを用いることとした。

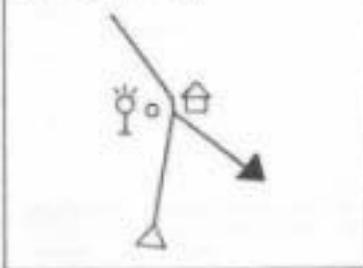
くうこととなった。

結果的には5C/Pで計時ミスがあったため、この区間はヤヤシセルになった。ミスコースしたクルマは数われることとなったが、出だしでのつまずきだけに、ドライバーに与えたショックは大きかったと思う。わがチームの小西輝男/中田若吾組もここでミスコースし、落ち込んでいた。

実はこの区間は昨年も走っており、われわれはこの点に気づいていたため、昨年の区間距離



(実際mE印象)



の狂いのデータ(昨年は108m引っかいた)をあらかじめ調べておいた。このため、コマ地図の形状が少々違う気はしたものの、距離のデータを信用できたので、ミスコースせずに通過することができた。スタート前のコース図解析作業と、以前のデータ活用の有効性が発揮された好例といえよう。

さらに昨年のデータから2次補正を行っていたので(2・5kmで約100m引っかくとして1km当たり4秒先行させた)、21区地点をほぼオンタイムで通過できた。当然21区で計測した



サスペンションもろけてリタイヤとなり連続入賞がストップ

区間距離データで再度2次補正するので、21区の220m先にあった5C/Pには2秒の誤差で入ることができた。このように、従来のデータを生かした2次補正も有効だ。

ACK3年連続優勝はならず

結局第3ステージは上りの舗装SSでマーチ勢に負けたりも、ラリー区間を無難にまとめたため、2番手の減点で上がることができた。これでトータ

ル2位まで浮上した。車は真選手と9秒の差はあるものの、第3ステージはSSが多いので、

道の悪い九州ではマーチ勢には不利なはず(パワーステアリングがない)、予定とおり優勝をねらえるところまで来たという感じだった。

順調にチェックをこなしていたが、2本目のSSである16C/Pをスタートした直後の右コーナ

一瞬リヤがアウトへ出たのでカウンターの当てたところ避にしりを振り、右コーナーのインにあった壁に右リヤタイヤをヒットしてしまった。このためリヤサスのリンクが折れてしまい、まともに走れない状態になってしまった。結局このSSは走ったもののリタイヤ。3年連続優勝の目標はついでに失った。特に勢いをあせったわけでもないのだが、観戦手としては珍しくクルマを壊してのリタイヤとなり、昨年のコンビ達成以来続いていた連続入賞も、ここでストップしてしまった。

ラリーのほうは大橋千明選手が舗装のSSで頑張り優勝。5C/Pがキャンセルになったため小西/中田組が浮上し2位、3位には小林康晃/辻井利宏組のジュミニが入った。

ラリーは最後までわからないものだ。5C/P手前でミスコースし、大量減点を受けて落ち込んでいた小西/中田組が、最後まであきらめずに頑張り2位になった。なかなか立派だと思おう。途中でリタイヤしてしまい、最後までラリーを楽しめなかったのが残念だが、次の4区では再び3年連続優勝をねらって頑張るつもりだ。